

【にんげん部門（中学生の部）・文化時報社賞】

お母さんと仲直りした日

札幌大谷中学校 2年 吉川 碧

1年前、僕はお母さんと喧嘩してしまいました。理由は、僕が宿題をせずにゲームばかりしていたからだ。お母さんは何度も「早く宿題をきなさい」と言ったけれど、僕は「うるさいな」と口答えしてしまいました。その瞬間、お母さんの悲しそうに曇ったのを覚えている。

僕はそのまま部屋に閉じこもり、お母さんの言葉を見殺しにした。心のどこかで、お母さんが自分を心配していることをわかってはいたけれど、素直に謝ることができなかった。時間が経つにつれて、僕の胸にじわじわと罪悪感が広がっていった。夕食の時間になりリビングに降りていくと、お母さんは何も言わずに僕の前にご飯を置いた。いつもと変わらない笑顔だったけれど、僕はその笑顔がどこか無理をしているように感じた。食事中、僕は何度も「ごめん」と言おうとしたけれど、喉に詰まって言葉にならなかった。その夜、布団の中で僕は考えた。お母さんは毎日僕のための一生懸命働いてくれてるのに、僕は感謝の気持ちを伝えるどころか、逆に怒鳴ってしまった。お母さんのことを思うと涙がぼろぼろとこぼれ落ちた。次の日の朝、僕は意を決してお母さんに謝ることにした。リビングに行くと、お母さんが台所で朝ごはんを作っていた。僕はお母さんの背中に向かって、絞り出すように「昨日はごめん」と言った。すると、お母さんはゆっくりと振り返り、優しい声で「いいのよ。私も言いすぎたかもしれないね」と言ってくれた。その瞬間、僕はお母さんの胸に飛びこんで、思わず泣き出してしまった。お母さんの温かさに包まれて、僕は心から安心した。

その日から、僕はお母さんに素直に感謝の気持ちを伝えるようにしている。喧嘩をしたけれど、そのおかげでお母さんとの絆がさらに深まったように感じている。お母さんは僕にとって世界で一番大切な人だ。